散策と思索の径

博物館と「さわる」

小山（こやま） 修三（しゅうぞう）
吹田市立博物館館長
民博 名誉教授

博物館に人が来なくなっている。その流れを変えることはできないだろうか。じつはわたしも宝物館のような博物館がニガテだった。宝物をケースにおさめ、禁止札をはりめぐらせて、いかにも見せてやるという雰囲気がいやだったからだ。それでも博物館に勤めているのだから、と機会があれば見てまわった。そして、カギのひとつが、これまでタブーにしてきた展示品に「さわる」ことだと考えるようになった。そうなるまでの思考の径を振り返ってみることにしたい。

スウェーデンの博物館

はじまりは、一九七八年、ストックホルムで「視覚障がい者のための展示――バイキングの生活と文化」のコーナーをみたことだった。村の生活や戦いを描いた、素人っぽい想像図が数枚、さわってわかるように凹凸をつけてあった。発掘品はケースのなかに厳重におさめられていたと思う。それでも「さすが福祉国家スウェーデン、しかし博物館は将来ここまでやらねばならないのか」という思いが脳裏をよぎった。わたし自身まだ博物館の既成概念から抜けていなかったためか手元にはスナップ写真すらない。

アボリジニの美術館

オーストラリア・アボリジニの美術工芸品が注目され始めたのは一九七〇年代になってからだ。政府の援助を受けて各コミュニティにアートセンターがつくられ、たくさんの美術工芸品が集積されるようになった。そのうちに、売れすじ画家の個展を都会でやろうとか、部族の歴史がわかる資料室を作ろうといった案が出てくる。ノーザンテリトリ・マニングリダの町は特に意欲的で、小さな博物館まで作り上げた。ところが、高温多湿な熱帯性気候に対し、空調など設備が不完全で、数年のうちにぼろぼろになった。しかし、アボリジニたちの生活は使い捨て、高価な芸術品でも神聖な儀礼具でも「モノはまた作ればいい、大切なのは精神だ」とこだわらない。宝物館とは対極の考え方である。だから、政府の援助などで機運が盛り上がれば再び博物館を作るということを繰り返しているうちにそれなりの形ができてくる。

ルーブル美術館

二〇〇八年に訪れたルーブル美術館には「障がい者のための特別室」があった。古代の彫刻を小型にした精巧なレプリカが並べてあり、インストラクターに連れられた子どもたちがそれにさわりながら熱心に見ている。それにしても、改めて驚いたのは、ヨーロッパ美術館の監視の緩やかさだ。壁に掛けた名画の前は低いロープの柵があり、監視員がいるのだが、基本的には露出展示である。これは観客の文化レベルの差なのだろうか。絶対さわるなという日本の博物館のあり方はいったいいつ、どこからでたのだろう、と不思議に思った。

みんぱくとすいはく

二〇〇六年、みんぱくで廣瀬浩二郎さんが中心となった企画展「さわる文字、さわる世界」が開かれた。このとき国際シンポジウムも開催され、今世界で進行している誰にでもわかる博物館ユニバーサル・ミュージアムの状況がよくわかった。メトロポリタン美術館ではエジプトの石造彫刻に直接さわるところまで踏み切っていたのに驚いた。コンピュータの駆使もめざましかった。

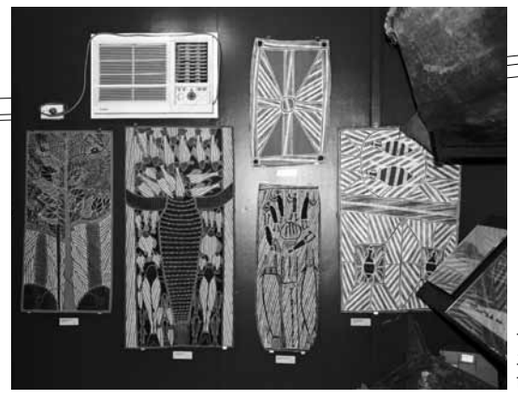
同じ年、吹田市立博物館でも実験展として「さわる 五感の挑戦」をはじめた。仏像のレプリカのほか、楽器、おもちゃなどを消耗品として購入してならべ、自由にさわってもらった。その後、広瀬さんと一緒に「誰でも楽しめる博物館」の共同研究をたち上げた。ここでも、さわらせるべきかどうかについての議論が沸騰している。みんぱくを開館したとき梅棹館長は「さわる」のは当たり前だと言っていた。その精神を受け継ぎ、率先して「守る」より「開く」、つまりさわらせる方向へリードして、博物館の将来のあり方に一石を投じてほしいと思う。

ルーブル美術館。
障がい者のための特別室

吹田市立博物館での実験展
「さわる 五感の挑戦」にて。
梅棹さんが来館したとき
2006年10月(撮影・藤田京子)

イルカラの博物館。劣化したものも多い
1980年

吹田市立博物館「さわる 五感の挑戦
Part Ⅳ」の関連イベント、香道の体験
講座 2009年9月（撮影・藤田京子）



マニングリダの博物館。
エアコンはあるがよく止まる
1988年（撮影・久保正敏）